

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	堀 晋也
論文題目	フランス語学習者の自律学習能力促進のための動機づけ研究		
(論文内容の要旨)			
本論文は、日本の大学のフランス語学習者の自律学習能力を促進するための動機づけについて考察することを目的としている。第1章から第4章までを理論編としてフランス語教育、動機づけ、自律学習について概観し、第5章から研究編として、動機づけ理論のひとつである自己決定理論を中心とした枠組みで5つの研究を扱い、フランス語教育への示唆ならびに結論へと繋げている。			
第1章では、フランス語教育の現状として、履修者数、学習者の動機づけ、フランス語教育の現在の方向性について触れている。第2章では、心理学の分野で示されている動機づけの定義と外国語教育における動機づけ研究でも利用されているいくつかの理論を紹介している。そのなかでも、本論文の一連の研究の中心的枠組みとなる「自己決定理論」については、理論の成立に至るまでの経緯も含めてより詳しく考察している。			
第3章では、これまでの外国語教育における動機づけ研究を扱っている。まず、研究の初期から続く Gardner らの「社会心理学的アプローチ」と1990年代から始まる、心理学の動機づけ理論を応用した「認知論的アプローチ」について考察している。続いて、社会心理学的アプローチと認知論的アプローチの知見を取り入れた Dörnyei と Ottó の動機づけプロセスモデルを取り上げ、外国語学習の一連のプロセスのなかで各理論における諸要素がどのように関わっていくのかを考察している。最後に本論文での研究と同じ自己決定理論の枠組みによる先行研究を概観し、本研究との相違点を明確にしている。			
第4章は自律学習についてである。まずその誕生と発達の経緯に触れ、次に「自律学習」の定義について考察している。そこでは従来の定義に加えて Benson による三つのレベルの自律という考えを取り上げ、それぞれのレベルの自律について詳しく述べている。続いて、自律学習と動機づけの関係で、Ushioda にならって、本論文の研究の前提となっている自律学習能力促進のための内発的動機づけの重要性について考察している。最後に自律学習を支援するツールとして日本の外国語教育でも導入が進められている CALL とポートフォリオについて触れている。			
第5章からは、実際におこなった研究について述べている。まず第5章で一連の研究の概要を述べ、次の第6章の研究1では、日本の大学のフランス語教育における自己決定理論の応用可能性を検討するため、自己決定理論の妥当性、すなわち基本的心理欲求の充足によって動機づけの自己決定度を高めるプロセスの妥当性を検証している。第7章の研究2では、動機づけの自己決定度と自律学習能力ならびに成績との関連性についてそれぞれ複数年にわたっておこなった調査を分析している。			

理論的側面の研究 1、2 に対して、実践的な側面の研究として、第 8 章、第 9 章の研究 3、4 では、ともに自律学習を補助する役割が期待されている CALL とポートフォリオの動機づけならびに自律学習能力に対する有効性をそれぞれ通年にわたって検証している。最後に別の視点から動機づけについて考察し、フランス語教育への示唆を目的として、第 10 章の研究 5 では期待-価値理論の枠組みで、フランス語学習者の動機づけの低下の原因を分析している。

一連の調査研究の結果を分析し、以下のような事実を明らかにするとともに、フランス語教育への示唆を得ている。

- (1) 自己決定理論は日本のフランス語学習者の動機づけ研究にも適用できる（研究 1 より）。
- (2) フランス語学習者の動機づけを高め、自律学習能力を促進するためには、学習者を内発的に動機づける、すなわち動機づけの自己決定度を高めるか、あるいは高い状態を維持することが重要である（研究 2、研究 5 より）。
- (3) 内発的な動機づけは自律学習能力の強化と結びついているが、それには一定の時間を要する（研究 2 より）。
- (4) 自律学習能力が強化されても、必ずしも学習成果は向上しない（研究 2 より）。
- (5) 動機づけの維持のためには、自己決定理論で示されている通り、基本的心理欲求の充足が必要である。また、教材開発や授業設計においては、基本的心理欲求の充足だけではなく、充足を阻害する要因に対しても留意することが求められる（研究 1 より）。
- (6) CALL やポートフォリオの活用は、直ちに動機づけや自律学習能力を高めることには繋がらないものの、基本的心理欲求の充足という補助的な役割として機能する可能性がある（研究 3、4 より）。
- (7) フランス語学習者の動機づけの低下は、フランス語は実用的にあまり役に立たないにもかかわらず、フランス語は難しく、学習には時間がかかると学習者が認識していることによる。（研究 5 より）

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本の大学のフランス語学習者の自律学習能力を促進するための動機づけについて考察することを目的として、次の8つの点についてそれぞれ綿密な調査研究をおこなっている。

- (1) 自己決定理論の妥当性
- (2) フランス語学習者の自律学習能力を促進し、動機づけを高める方策
- (3) 動機づけと自律学習能力との関係
- (4) 自律学習能力と成績との関係
- (5) 動機づけと基本的心理欲求との関係
- (6) CALL による自律学習の有効性
- (7) ポートフォリオの動機づけならびに自律学習能力促進に果たす役割
- (8) フランス語学習者の動機づけ低下の原因

これらの8つの点に関する調査結果を分析し、以下のような事実を明らかにし、フランス語教育への示唆を得ている。

- (1) 自己決定理論は日本のフランス語学習者の動機づけ研究にも適用できる(研究1より)。
- (2) フランス語学習者の動機づけを高め、自律学習能力を促進するためには、学習者を内発的に動機づける、すなわち動機づけの自己決定度を高めるか、あるいは高い状態を維持することが重要である(研究2、研究5より)。
- (3) 内発的な動機づけは自律学習能力の強化と結びついているが、それには一定の時間を要する(研究2より)。
- (4) 自律学習能力が強化されても、必ずしも学習成果は向上しない(研究2より)。
- (5) 動機づけの維持のためには、自己決定理論で示されている通り、基本的心理欲求の充足が必要である。また、教材開発や授業設計においては、基本的心理欲求の充足だけでなく、充足を阻害する要因に対しても留意することが求められる(研究1より)。
- (6) CALL やポートフォリオの活用は、直ちに動機づけや自律学習能力を高めることには繋がらないものの、基本的心理欲求の充足という補助的な役割として機能する可能性がある(研究3、4より)。
- (7) フランス語学習者の動機づけの低下は、フランス語は実用的にあまり役に立たないにもかかわらず、フランス語は難しく、学習には時間がかかると学習者が認識していることによる。(研究5より)

いずれも今後のフランス語教育のみならず外国語教育にも活かせる有用な示唆であり、高く評価できる。

本研究は次の点で独創的である。

(1) 自律学習することによって学習者の動機づけは強化されるという Dickinson の

主張に基づいている従来の研究とは異なり、学習者を動機づけることによって学習者の自律学習を支援するという Ushioda の考えに基づいている。

(2) 基本的心理欲求の満足度による動機づけの推移について調査研究し、動機づけを維持するには基本的心理欲求を満たす必要があることを明らかにしている。

(3) 動機づけと自律学習の関係について調査研究し、自律学習を促進するためには、学習者を内発的に動機づける必要があることを明らかにしている。

(4) 動機づけの強化と自律学習能力の促進に対する CALL とポートフォリオの有効

性について調査研究し、CALL とポートフォリオは基本的心理欲求の満たすために

補助的に役立つ可能性があることを明らかにしている。

本論文は、外国語教育論講座の目的に沿った研究であり、今後の外国語教育の研究ならびに実践への貢献が期待される。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成 24 年 2 月 13 日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降